

インドネシア・南スラウェシ州ガレソン郡におけるトビコ漁の実態調査

ー トビコ利用の変遷と資源の持続的利用の在り方ー

平成 25 年入学

派遣国：インドネシア

遅澤 泰

キーワード：同行調査，フィールドワーク，聞き取り調査，先行研究との違い，トビコ漁の変遷

対象とする問題の概要

私が研究の対象にしているのはインドネシア南スラウェシ州ガレソン地区のトビコ（トビウオの魚卵）漁の実態調査である。このガレソン地区というのは南スラウェシ州の州都であるマカッサル市の南隣りに位置し、タカラール県の北西にある三つの郡（北ガレソン郡，ガレソン郡，南スラウェシ州）からなる。このガレソン地域では 17 世紀頃よりトビウオの漁獲をおこなっており、1970 年ころから、トビウオの魚卵であるトビコを主に日本などの海外市場向けに漁獲してきた。しかし、近年ではトビコ資源の枯渇が危ぶまれてきており、それまでガレソン地区の近場であるマカッサル海峡でトビコ漁を行っていたガレソンの漁師が、2001 年頃より 1000km 以上離れた西パプアのファクファク沖の海域で危険を冒してまでトビコの漁獲をするようになった。先行研究でガレソンのトビコ漁を扱った研究は多くはなく、また同海域での資源管理の観点からのアプローチされた研究はまだ少ない。



(写真 1 麻袋に詰められるトビウオ魚卵トビコ)

研究目的

私の研究目的は、ガレソン漁民のトビコ漁の同行調査並びにマカッサル海峡におけるトビウオ資源の資源管理の観点からのトビコ漁のアプローチをすることである。そのために今回のフィールドワークでは、来年度に予定しているガレソン漁民のトビコ漁の同行調査やトビウオ資源の資源調査のための準備として、私が同行調査する漁船の選定や漁師達と信頼関係を築くことを重視した。さらに、マカッサル市にあるハサヌディン大学の海洋水産学部水産資源管理学科のシャムス・アラム・アリ教授の下を訪れ、インドネシアのトビウオ資源の管理の在り方などを学んだ。今回の経験を用いて、来年度1年ほどインドネシアでトビコ漁調査を行う。



(写真2 トビウオ資源の資源管理の在り方を教えてくださるハサヌディン大学アリ教授と筆者)

フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークでは、今までの先行研究にはなかった今現在のトビコ漁やトビコの流通に関するデータを得ることができた。具体的には、1970年代における南スラウェシ州のトビコの輸出先は日本がメインでありほかに輸出先もなかったが、現時点では輸出先の国も10か国以上になっていることや、現時点では輸出量が日本よりも韓国のほうが多く、中国や台湾など2000年以前ではほとんど輸出されていなかった国やリトアニアやウクライナなど2000年になってから輸出させるようになった国のデータを取得することができたという点である。また、ガレソン地区のトビコ漁師は漁師自身が漁船を所有しているということは稀であり、主に魚船を所有している資本家の漁船を使うことが多い。トビコ漁師が資本家の漁船を使用するとその漁船の漁獲に応じて漁師たちの現金収入が決まる。このことは今も70年代も変わらないが、70年代では漁船にかかる諸経費を漁師達が負担していたようだが、現在では資本家が漁船にかかる諸経費を払うことが珍しくないようだ。かつては、漁獲物を現金換算してその何%が漁師達で何%が資本家と決められていたが、現在では予め漁師が今年は何キロ漁獲すればいくら払うというのが漁師と資本家の間で決められているということが、今回のフィールドワークでわかった。さらに、漁師たちが使う漁船の船外機が以前であれば、主に日本メーカーの船外機を使用していたが、最近では価格が日本のメーカーの5分の1程度の中国メーカーの船外機を主に使用しており、およそ2~3年に1度の割合で船外機を新しくしていることが分かった。このことから資本家が漁船のコスト削減をしていることが窺えた。

また、今回ガレソン地区で大資本家の一人であるHJ.Tへの聞き取り調査でHJ.Tが所有している漁船の数やそのすべて漁船の2013年の漁場や、すべての諸経費並びにそれぞれの漁船の漁獲量のデータを得ることができた。



(写真3 トビコ漁に使われる漁船パトラニ)

今後の展開・反省点

今後の展開としては、来年度にガレソンの漁船に乗船し、トビコ漁の同行調査を行うつもりである。また、今回フィールドワークで得られたデータの裏付けや分析を行い、トビコ漁の全体像を把握することで次回の調査では、今回気づかなかった点や疑問に思っている点を発見や解決ができると考えている。さらに今後は何らかのかたちで、ガレソンのトビコ漁は資源管理の視点からもアプローチしていくべきである。

反省点としては、今回の調査ではインドネシアで調査許可を取得するのに想定外の時間がかかり、その後の調査がずれ込んでしまったことや、私の渡航期間が現地でのトビコ漁の時期とずれていたために十分な聞き取り調査ができなかったことが今回の反省点にあげられる。この反省点を次回の調査に生かすためには、次回の調査でトビコ漁の出漁の時期である4月頃に渡航し、調査許可の申請を今回の申請より早くすることが必要であると考えている。